

通常の小学校に在籍する視覚障害児童への 点字切り替え指導に関する実践

— 一点字に抵抗感を持つ児童の点字触読速度および点字学習に対する態度の変化に着目して —

○岩田恵実 二宮一水 戸嶋純那 佐島 毅
(東京都立久我山青光学園) (筑波大学人間総合科学学術院) (筑波大学人間系)

KEY WORDS: 点字切り替え 視覚障害児童 通常の小学校に在籍児童

I. 目的

視覚障害児童には就学以降に視力が低下し、使用文字を墨字から点字へ切り替えなければならない者がいる。使用文字を墨字から点字に切り替えることは、技能的にも心理的にも容易でなく、特に心理的抵抗感として奈良・佐島・柿澤 (2010) は、見えている状態での点字学習への抵抗や点字獲得そのものの難しさへの抵抗などをあげている。加えて、通常の小学校で使用文字を墨字から点字に切り替える場合には、常時、点字の専門的な指導が受けられないことや、点字を使用する機会が限定されていることなどの課題があり、より点字に抵抗感を持ちやすい状況にあると考えられる。

本研究は通常の小学校に在籍する点字に抵抗感を持つ児童に対して家庭訪問およびオンラインによる点字切り替え指導を行い、点字触読速度（以下、触読速度）および点字学習に対する態度の変化を分析し、点字への抵抗感が軽減する過程について検討することを目的とした。

II. 方法

1. 対象者：通常の小学校に在籍する 3 年生の視覚障害児童（以下、A 児）とその保護者。A 児は網膜色素変性症であり、視力は両眼 0.1。眼振が強く視野が 5 度と狭いことや、読速度が 57 文字 (MNREAD-Jk) であること、将来視覚活用が困難になりうる疾患であることから、2 年生時に点字を勧められ、B 盲学校に週に 1 回、通級による指導に通い、約 1 年間の点字指導を受けた。初めは点字に興味を持ち、意欲的であったが、次第にその習得の難しさや触読の不快感を訴え、抵抗感を持った。

2. 点字切り替え指導の概要：3 年生の X 月から指導者による点字切り替え指導を 1 回 60 分程度、計 40 回を 44 週に渡って行った。指導は、初回～19 回目を家庭への訪問によるもの、20 回目～40 回目をオンラインによるもので行った。点字に抵抗感を持っていることや触読速度が 30 マス/分と点字学習入門期の初期段階であることから、触読への動機付けを行い、点字への抵抗感を軽減することを重点方針とし、基本的な触読の指導に加え、点字タイプライターを介して指導者としりとりをやる課題など楽しく触読に親しむ指導などを行った。

3. 手続き：点字切り替え指導時の様子をビデオに記録し、A 児の触読の様子を分析した。また、A 児の点字への抵抗感について保護者への半構造化面接を指導開始時、7、10、19、26、40 回目の指導後の計 6 回実施し、分析した。なお、保護者に本研究の主旨を説明・同意の下、実施した。

III. 結果および考察

I 期：消極的点字学習期（1 回目～6 回目の指導）

初回および 2 回目の指導では、触読時や指導者が教材を準備している間に足元のコンセンートを頻繁に蹴る行動がみられた。3 回目の指導時に、「丁寧に読めればゆっくりでも大丈夫だよ」と言葉かけをしたり、教材を準備している間に折り紙などの気分転換になる課題を用意したりすると足元のコンセンートを蹴る行為は次第に減少していった。点字を書く課題では、書いた点字を確認のために自ら触読しようとする様子はなかった。また指導後には、すぐに拡大読書器の電源を

いれる様子が見られた。I 期の触読速度は 30～61 マス/分（平均 49.8, SD=12.3）と、徐々に早くなっていった。家庭では、保護者が点字の学習に誘っても、触読の不快さを理由に拒んでいた。

II 期：点字学習意欲芽生え期（7 回目～14 回目の指導）

II 期では、指導者と交代で 1 文ずつ作文しお話を作る課題を気に入って、家庭でも保護者を誘って行うようになった。II 期の触読速度は、47～110 マス/分（平均 78.0, SD=16.6）で推移し、日によって安定しなかった。II 期の途中から始まった長期休みでは、1 日 10 分程度触読に取り組めるようになった。また、保護者が点字切り替え指導の回数を増やさないかと A 児に提案したところ、「宿題が増えるのは嫌だ」と言いながらも、受け入れた。保護者によると、A 児は未だ触読の不快さを感じているが、点字の必要性は理解し、頑張ろうとしているとのことだった。

III 期：意欲的点字学習期（15 回目～29 回目の指導）

20 回目からオンラインによる指導を開始し、指導の頻度が増加した。それに伴い指導者の直接の連絡手段が確保され、指導外の日に点字の表記について質問してくるようになった。III 期の触読速度は、66～92 マス/分（平均 79.5, SD=7.9）であり、II 期と比べて安定していた。保護者によると、III 期の途中から弱視学級が設置され、担当教員に点字の日記を書いて出すことを楽しみにしているようだった。また墨字よりも点字を読む方が良いとはいかないが、以前のような点字への抵抗感を示すことはなくなり、読み間違いが多いものの、墨字と同じ速さで触読できているとのことだった。

IV 期：積極的点字学習期（30 回目～40 回目の指導）

36 回目の指導以降、自分の満足した速さで触読できた日には、保護者に対して合図を送るようになった。37 回目の指導では、触読した文字を今までより速く口に出している様子が見られた。IV 期の触読速度は、89～129 マス/分（平均 108.6, SD=14.7）と、向上していった。家庭では、触読速度の目標を自ら設定し、保護者に話しているようであった。保護者によると、弱視学級から配布された点字の新聞をニュースキャスターになりきって読むなど、楽しく触読に取り組めており、弱視学級から墨字に関わる宿題が出た際には、「今日は墨字でラッキー」と述べる程度で、点字が使用文字として定着しているとのことだった。

IV. 結論

点字への抵抗感を軽減することを重視した 40 回の点字切り替え指導を 44 週に渡って行った結果、触読への意欲、触読速度の向上とともに、点字への抵抗感も軽減していった。このことから、点字に抵抗感を持った児童への点字切り替え指導では、基本的な触読指導のみを行うのではなく、児童が「点字を触りたい」と思えるような課題を柔軟に設定していくことが重要であると考えられる。

《文献》

文部科学省 (2003) 点字指導の手引き（平成 15 年改訂版）．大阪書籍。
奈良里紗・佐島毅・柿澤敏文 (2010) 弱視生徒に対する点字切替指導に関する研究—指導時の心理面への配慮と対応を中心に—．弱視教育, 48(3), 1-5.
(IWATA Emi, NINOMIYA Hitomi, TOSHIMA, Junna SASHIMA Tsuyoshi)